

聞き取り記録 ある日雇労働者の戦中・戦後（下）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-24 キーワード: 作成者: 能川 泰治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/0002002526

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



聞き取り記録 ある日雇労働者の戦中・戦後（下）

能 川 泰 治

三 第五回調査（二〇一〇年三月二〇日実施）より

（一） 神戸での戦災体験をめぐって

― 今度は戦時中の体験談で伺いたいことがあるんですけど、空襲を受けたときの話とか、空襲が終った翌日の話とか、僕も聞いてて、凄まじい内容の話がいっぱい出て来るんですよ。で、そのあたりのことで訊きたいんですけど、例えばね、強烈な体験やと思うんですよ、燃え盛る火の海を逃げ回っているときに、足をつかまれたと、そして、その手を叩いて逃げた、と。そういう体験って、その後の人生に重くのしかかるとか、トラウマになるとかそんなんは…。

ヤス それはない。もう忘れてしまおう。過去のことは考へんようにしてある。そんなことしとつたら、生きていか

れへん。あの時は悲惨やったなあ。背中燃えてなあ。昔は用水路いうてな、水を溜める、こんな近所に作つとつたところがあんねん。ほな、焼けてくるから、熱いから、みんなつかるやろ。ほな湯が沸いてきてやな、みんな人間、生煮えになつて浮いてくんねん。熱いから、湯が熱いから、沸くわけやから、人間のゆでだこや。せやからつて、燃えているから、水から出られへんやん。出たら焼け死んでしまふから。これは、この場面は口では言いかねんわな。悲惨な状態やったな。

― で、空襲の翌日に、火葬をやっているところを見たわけですよ。

ヤス うん、生田神社の境内でね。枕木を四つ、こう組んでね、そこから人を、薪燃やして、上からポーン、ポーンつていくわけ。ほんなら、ニュー、ニューツと、するめを焼

いとるみたいに、へへへ（苦笑）。

— この前のインタビューの時でも、気持ちを、「かなんなあ」とかね、「悲惨やで」とおっしゃってましたが、そういう現場を見たことによって、人間に対する見方とか、人の生き死にについての見方が変わってしまったということはありませんか。

ヤス 多少はあるわな。うわーっと思って、人間は最後になつたら人を信用できんなあいうこと。自分の身がかわいいから。最後になつたら、どんな人間でも裏切りよるから。自分をちよつともようしようと思つてな。

— 火葬の現場とか、人の焼け死んだ死体を見て、人間は最後になつたら裏切るといふふうに思つていうのは、どういうことなのか、因果関係がよくわからないのですか。

ヤス いやあ、まあ、人間、土壇場になつたらな、そないなるいう意味や。結果、最後になつたら、自分の身がかわいいわけや。人間は最後になつたら、とどのつまりは裏切るいうわけや。

— それって、ヤスさん自身が燃え盛る火の中で足をつかまれて、下駄で叩いて逃げたという体験と関係しているんですか。

ヤス あるやろな。手を叩かな、こう、握られたら、逃げ

られへんやん。昔は下駄を履いとつたから、ガンガン叩いて、ほなやつぱり、ほつと見たら、周囲は焼けとるから、熱さで放したんか、どうか知らんけど、あのまま握られたままやつたら、自分も死んでる。焼けて。なんせ周囲がボツボ、ボツボ、燃えていきよんねんから。ほんま地獄の沙汰や。

— そういう体験して、あつちこつちで、焼け死んでいる人の死体とか見たら、みんな、見捨てられたり、裏切られたりして、焼け死んだ人として見えたんですかね。

ヤス せやな、悲惨なもんやな。そら、見事なもんやな。

— 人間がモノのように見えてしまうなんてことはなかったですか。火葬しているときに、するめみたいに手がこなるとかいう話でしたが。

ヤス うん。するめ焼いとるようなもんや。この枕木と枕木の間、ニューツと出て来るんや。人間、脂があるでしよ、その脂が出てきたら、ニューツ、ニューツと。焼き場やね、棺桶がボーン、ボーンと破裂するいうのは、そや。人間が熱さで仁王立ちしたりな、ガスの力か何や知らん、あんねやろな。ボーン、ボーン、棺桶が破裂するいうのは。そら、熱い高熱にさらされとつたら、死んどつてもな、やつぱり、自然と手が伸びたり、足が伸びたりな、仁王立ちしよるやん。その意味や思うわ。せやから、「地獄

極楽この世にあり」ってな。その意味やと思うわ。

(2) 弁天浜争議をめぐって

— ちよっと話題が変わりますけど、やっぱり全日自労に
関わっていはったときの話で、弁天浜争議の話がね、
興味深いんですよ、私には。で、断片的にはね、スクラ
ムを組んで守ったとか、集落がどんな様子だったとか聞
いてますが、まとまったかたちで語ってもらってない
で、弁天浜争議について、ヤスさんなりの説明で結構な
ので、争議の一部始終を詳しく聞かせてもらえませんか
ね。

ヤス うん、あれは打算的で、みんな自然とそうなっても
うたんやろな。自分らが寝ているところがなくなっていく
んやからな、ほなやっぱり、自然とそうなるやん。それを
昔も、今で言うたら、昔で言うたら、弾丸道路やな、今の
高速道路や。争議のあったとこの下がちょうど、弁天浜が
あったわけ。橋げたの下やな。

争議いうたら、だいたい、あの辺では、港灣労働者が寝
とったから、寝泊りしとったバラックやからな、あそこで
寝とるのに、立ち退きなったら、寝られへんからいう、○
○で弁天浜争議が起こったわけや。焼けた海辺にバラッ
クが建って、そのバラックにみんな寝泊りしとったわけや。

むしろを引いてもうてな。

— ヤスさんは争議にはどう関わったんですか。傍観して
いたんですか。

ヤス いや、全日自労でね、渋川という委員長がおったん
や、その委員長の言葉通りに、みな右へ倣えしたわけや。
そら、立派な指導者やったな、年いっとったけど。こうや
思ったら、絶対に曲げんかったもんな。せやから、職安の
所長が来て「もうええ加減にしてくれ」と、「いや、働く
人間がな、奪われたらな、寝るところなかつたらどないす
んや、あっちこちでござる寝るんか」となったわけや。
で、その中で有力者が、みな、ええとこに替地もろてな、
移ったからな。

— バリケードも張ったとかいう話も。どんなバリケード
なんですか。

ヤス 人間のバリケード。阻止するのに。

— 何を阻止するんですか。警官隊。強制撤去に来た人。

ヤス そうそう。

— 委員長の指示に従って動いたということですか
も、ヤスさんの気持ちとしては…。

ヤス 「郷は郷に従え」というかたちで動くことになった
わけや。まあまあ、今でいうたら群衆心理みたいなもんや。
俺んこの寝泊りしているドヤがな、なくなったら困るや

ん、その意味。

(3) 階級意識がどう変わったのか

— 前のインタビューで面白いと思ったのは、全日自労の経験で、何かもの見方は変わりましたかと訊いたら、そのときのヤスさんの返事は、「階級意識が変わった」と。

ヤス うんうん、それはわかるわ。変わった。

— そのところを、もう少し詳しく聞けたらと思うんですけど。つまり、最初はこういう意識やったけど、それがこういう意識になったというかたちで説明してもらえないことはできませんか。

ヤス うん、自然とそうなってきたわな。争議の中で、何も知らん人間が、寝るところ無くなるいうたらな、やつぱり、そう変わってくるわな。で、立ち退き反対となったわけや。ようけ寝泊りしとつたからな、弁天浜いうところは、まあ、今でいうたら釜のセンター（あいりん総合センター）みたいなもんや。働人の集りの場所が。集合場所やから。結果、寝るところと飯屋とありやあ、人間生活できんねや。せやから、人間は持っていきようで、どないにでも変わるいうこっちゃ。

— 最初どう思っていたのか、どう変わったのか、という

ことなんですけど。

ヤス せやから、巻かれようかたちやな。そのとき、そのときに巻かれようて。まあ、利口な考え方やけどな。まあ、昔でいうたら階級意識みたいなもんやな、変わってきたいうわけや。その意味を言うたんちやうかな。階級意識って僕ら、そんな階級意識も何も考えてへん。その場で「郷は郷に従え」という意味やったと思うわ。今の社会でもせやもんな。「郷は郷に従え」と。

— 最初は「郷は郷に従え」みたいなかたちやけど、だんだん階級意識が芽生えてきた、みたいなことですか。

ヤス うん、まあまあ、そうやな。現場に応じてな。「なんでこんなことやってるんかな」と。その意味やな。僕は寝るところないから、寝るところを守るんやと、その意味やな。それが階級意識みたいになってきたんちやうか。

— ああ、とにかく必死に生きていて、食べるものを獲得するのに必死、寝るところを守るのに必死。で、周りのたたかえと言うからたたかうという感じやったんやけど、だんだん、だんだん、自分はある一つの階級みたいな...

ヤス うん、思うたんやな。

— で、その続きのところなんかでね、私が「そういう全日自労に関わる中で、階級意識が変わったというか、み

んな同じ人間やというような意識が根付いてきた、と」
と言ったのに対して「そうそう。で、年がいく度にみんなちりちりばらばらになっていったわけだね」と。だから、こういうことですか、最初はまあ、「人間みんな同じや」という感覚でいたんだけど、その全日自労に關わっていくなかで、やがてみんな職を得て出て行ったりとか、学のある人はそれを生かす職に就いたりするわけで、そんな中でやっぱり自分はある階級（に属している）みたいな。

ヤス うん、それはあるわな。

— そういうふうに理解していいですか。ヤスさんがおっしゃった、階級意識が変わったという話は。

ヤス セやなあ、階級という言葉自体がな、僕は意味わからんねん。何の階級やいうこつて、同じ人間でな、寝るところと食うところを守るのな、それが階級意識と言えるのかはな、まあ、僕にはわからんけど、なるようにしかならんという、打算的な考えが湧いて来るわけやな。それが階級意識になるんかな。

— なるようにしかならない、みたいな意識。

ヤス そうや。なんぼ逆立ちしてみてもな、なるようにしかならへんのやから。今のな、年齢が経つてもな、それ以上逆ろうたらな、〇〇〇してしまうというわけや。

— すみません、もう一回。それ以上逆らうと何とおっしゃいましたか。

ヤス なるようにしかならんのかな、自分が思うようにしようと思つたらな、どつかでな、毘に入ってしまうというわけや。まあ、言うたら悪いけど、今の社会がそうやる。もうええわつて思つて、ブタ箱に入ったら三度の飯を食わしてくれて、風呂も入れてくれて、せやから今そんなんが増えてるわけ。

— なんか、階級意識が芽生えるといつても、労働運動でよく聞くような、「徹底的にたたかうぞ」というのとはちよつと違いますね。

ヤス うん、たたかっても、家がなくなったら、住み家がなくなったら、みんな散ってしまうやん。その意味や。せやから、知らん人は、外から見ても、「あのおっさんら、何やってんねん」と思うわけや。「あほなことやつとるわ」言うて（笑）。

— その運動をやっている人をですか。

ヤス 外部から見たらな。

— 間違いないかどうか、確認させてもらいますけど、私の聞き方が。最初はもう、人間皆同じみたいな感覚でいた、と。

ヤス そうそう。寝るところないしな、仕事疲れてな、働

人が寝るところなかったら、人間みんな〇〇や、寝るところありやあ、かたちも変わってくるしな。その意味やな。

— まあ、戦争が終ったばかりで、あっちこっち焼野原になつているし、仕事だつて満足にあるわけではないし、だから「人間みんな同じや」と。

ヤス まあ、そうなるわけやな。ご飯がためにな、それせなしようがないわけや。

— それで、弁天浜争議でたたかう中で、何かその、人間みんな同じやと思つていたのが、何か違う、と。

ヤス うん。そうや。なんでこんなことするのかなあ、と。寝るところさえありやあな、そんなせんでもええわけや。そのねぐらをな、道路を作るのにな、きれいに整地するいうわけや。あの、今で言うたら、どういふのかな、道路の図面を作つたわけやから、寝るところは邪魔になるからどけ、となつたわけや。ほんで、争議が終つたわけや。

— 全日自労に関わり続けることへの疑問が生れてきたつてことですかね。

ヤス まあ、そうやな。

— なんでこんなことせなあかんのかなみたいな。

ヤス そうや。してもな、結果は退かんなんねんから。せやからまあ、そのときは、せやからな、そう思うけど。せやから、極端に言うたら、有力者が手塩をかけたような状

態やな。僕らはただ寝るとこないから、こなくなつたら、寝るとこないもん。ほな困るから。同じ共通点がどつかであつたんやろな。

— 最初はみんな住まいもないし、仕事もないし、だからみんな必死に生きている、そういう意味では人間みんな同じ、だつたのが、だんだん、だんだん、手に職を得て出て行く人とか、学のある人はまたそこから出て行つたりするし、そういうことが意識の変化とも関連している…。

ヤス まあまあ、そうなるわな。全然何も知らんとこへ、ただ寝るところが立ち退きになつたらどうするいうな、それが出たもんやな。事実、寝るとこ、あすこしかなかつたら。

(4) 「ニコヨンの歌」をめぐつて

— 少し話は変わりますけど、ニコヨンの歌なんかも聞かせてもらえましたよ。確か路上生活でアルミ缶拾いをしているときにね、ニコヨンの歌を鼻歌にして歌つていた、と。ニコヨンの歌つていうのは、どこで覚えたんですか。

ヤス 合唱団で覚えたんや。「ニコヨン暮らしは、雨や風にもひるみはせぬが、ニコヨン暮らしはどっこい生きてい

るぞ」という。

— 合唱団でそんな歌を教えてくれるんですか。インターナショナルとか、労働歌とはだいぶ性格の違つ歌ですね。

ヤス そうやな。あの時分は歌謡曲もないしな。

— 鼻歌みたいなかたちで愛唱していたんですか。

ヤス そうそう。

— 仕事しながらみんなで鼻歌まじりに歌っているとか、

そんなんですか。

ヤス そうそう。今でいうたら、民謡みたいなもんや。漁師さんなんかが疲れて船の中で歌う、自然と出たもんやと思うわ。

— そんな歌を歌っているときの気持ちって、どんなんでしょうね。インターナショナルとかやったら、団結するぞ、たたかうぞ、みたいな感じでしょ。

ヤス そのときは何も感じなかったな。みんなが歌うているから一緒に歌ったという感覚しかなかったから。

— 別になんか、たたかうぞという意欲が起るとか、そんなもんではないんですね。

ヤス まあまあ、意識は頭の隅っこにはあったやろな。闘争、闘争歌みたいなものやな。

— ニコヨンの歌にも、闘争歌みたいところがあるんですか。

ヤス そうそう。

— まあ、心意気というか…。

ヤス そうそう。まあ、そうやな。ニコヨン暮らしはひるみはせぬが、「どっこい生きてるぞ」というこっちゃ。

— バカにすんな、みたいな意味ですかね。

ヤス まあ、せやな。日当が二四〇円やからな。

四 第六回調査（二〇一〇年五月一七日実施）より

(1) 弁天浜争議をめぐって(再び)

— 今日まず最初に伺いたいのは、弁天浜争議の話なんですよ。あの話はすごく興味深くて、それで三月に聞かせてもらった話も、もう一回レコーダーを聴き直して、いろいろ考えたんですけど、ものすごく肝心なことを聞くのを忘れていたというのがあって、それは何かということ、争議の後、どんな補償をもらったのかということなんですよ。

ヤス あれは補償ないねん。われわれは日銭を稼ぐから、せやから向こうに建ててるオーナーが替え地をもらうてね、土地をもらうて、補償してもうてるわけ。

— オーナーってバラックを建てている人。韓国の人でしょ、たよね。

ヤス そうそう。それで、補償は、僕ら住むとこないからっ

て、神戸市が兵庫区の高松町の三菱重工業、電機の横に仮設みたいなの、市が作っている共同住宅があるわけ。共同住宅というのかな、寮みたいなの。で、あそこに放り込んで、そこから電車に乗って、朝通っていたわけや。昼ひいて、こっちとこっちでずうっと、昼ひいて寝るだけの仮設住宅、仮設の寮みたいなもんやな。

— それって、一人一部屋ずつ割り当てられているんですか。

ヤス ずーっと畳一畳並べて、五〇メートルぐらいあるのかな。もう、寝たら畳一畳にいっぱいやから、背の高い人やったら、足が廊下の上に寝よるわけや。

— じゃあ、中央に長い廊下があつて、両サイドに畳が敷いてあるだけで…。

ヤス そうそう。一階と二階とね。それで緊急の場合に、一時収容所みたいなのこや。それを作ってるわけ。そこで寝とったわけや。

— 争議は妥結して、補償される人もいたけど、ヤスさんたちはねぐらがなくなったら困るといって、一生懸命運動に協力したのに、補償らしい補償もなく、ここに住めというて、仮設住宅を割り当てられたといふことですね。

ヤス うん、そうそう。仮設寮みたいなもんや。で、向こうに建てとったオーナーや、あんなんは、替え地もうて、

ほんで諏訪山の、横に川があつた、川の横になんぽか替え地もうて、家建てて、もう今はちゃんと散髪屋もあるし、いろいろある。まあ、それは殆ど韓国人が多いな。日本人いうたら、六人ぐらいしかおらん。他みんな韓国人や。

— そうなんですか。で、さっき訊いたことの確認になりますけど、共同住宅のあつた場所って、神戸市の兵庫区の何町でしたっけ。

ヤス 高松町。

— その仮設の寮って、どこかの会社の社宅みたいなものだったんですか。

ヤス いや、そのように神戸市が作つとったんとちゃうか。あつちこつち、寝るところがなかったら、そこへ連れて行って寝とるわけや。

— で、近くに会社の工場とかあつたんですか。

ヤス 三菱電機。で、左側が兵庫突堤。で、中央市場があるから、じきわかる。今はもうないやろな、つぶして。経営が重なるから、市もつぶして、あの三菱電機の土地やら、払うたんとちゃうか。

— で、率直にその時のお気持ちを伺いますが、そういう待遇を受けたことについて納得はしてはりましたか。

ヤス そらもう、しゃあないやん。緊急の簡易宿泊所みた

いなもんや。大阪でいうたら。寝るとこだけで。朝は早う起きて、ほんで、電車乗って、電車の前、来たら、職安の前に、業者が朝ご飯作ってみんな売つとるわけや、ほんで、それ食べて、あの仕事に行きよったわけや。

— そうやったんですか。争議の結果、どういふふうにならうと、人によつてだしぶ違つてですね。

ヤス せやな。せやから、言うたでしよ、階級のあれが、その意味を言うたわけや。で、手配師もその辺に住んどるし。で、本多組の仁吉つつあんが来たいうことは、あすこに本多会という事務所があつたんや。で、それで、本多の仁吉つつあんが若い人がここにおるといふことで見に来たわけやな。どうやら、そんないきさつみたいなもんやな。

— 不公平感とか感じませんでしたか。

ヤス 何も考えへん。あの時分は。お金三〇円払うて寝るだけやから。ここで長う生活しよういふ観点がないから。ほんでまた、住めるようなとこちやうもん。

— ああ、バラック集落のバラック自体が。

ヤス そうそう。ほんまの仮設住宅。寝るいうだけのな、あれや。ほんでまた、焼けた跡に、こだかうに建つとるから、本建築なんか出来ひん。ほんまのバラックで寝泊まりするいうだけのもんや。

— それですかね、前に何度か話を聞いたときに、その辺の話がどう落ち着いたかということを知ったときに、「なるようにしかならん」といふ言い方をしたのはつたかど。

ヤス そうそう。あの時分はそんな考えしかなかったから。考えても何にもなれへんし。まだ焼け野原やからな。

— そうですか。ヤスさんのお話を聞いて思つたんやけど、ヤスさんにとつて、全日自労とか弁天浜争議に関わつたときのことつて、何か思いが複雑なんかなあと思つて。ヤス そうよ。そんな考えしかなかったから。

— なんかね、最初は歌声喫茶とか合唱団で仲間が出来たりとか、リーダーの人がすごい人やつたりする、その一方で、争議の話を聞いていると、割の合わない思いつつたか、利用されたみたいない思ひがあんのかなつて思つてですけど。

ヤス まあ、今思うたら、そんなもんやろな。振り返つてみたら、やつぱりあそこに寝とるから、寝るとこなかったら困るから、いふかたちでやつたわけやから。

— 何か主張したいことがあつても、主張できるような雰囲気ではなかつた。

ヤス ないない。

— 要結もねえ、本多仁吉さんが出て来てね、手打ちになつ

たら、もう文句も言えないでしょうしね。

ヤス そうそう。結果、高速道路の真下やからな。せやから、早う退けて、高速道路を通さなあかんから、せやから、まあ、役所はそんな考えやったんやろな。

— 争議の直後にね、自分たちは仮設の寮に住まわされて、一方で、バラックを持っていた人なんかは、替え地を与えられたりとかされて、それなりの構えが出来たわけでしょ。そんなんを見て割に合わんなとか、不公平やなとか、利用されてたんとちゃうかとか、そういう思いは、直後にはどうだったんですか。

ヤス 僕ら、そんな考えはなかったから。もう、要するに、寝るところがないから、何とかせえいうかたちで争議なったからな。ほんで、それが妥結したら、終わったら、今言うた寮に寝とったわけや。で、そこから、寝て、朝起きて、通って行きよったから。

— なんか、その頃になると、全日自労の運動に対する熱も少し冷めてきたんですか。

ヤス うん、そうやな、あれ立ち退きになったら（全日自労の）事務所がなくなるから、もう惨めなもんやな。みんなちりぢりばらばらになってもうた。

— 弁天浜争議がそういうかたちで落ち着いたというのは、大きいんですね。

ヤス そうや、みんな、バラック建てて金儲けしとった人は替え地もうて、おさまって、われわれは寝るとこないから、寝るとこいうて、（神戸）市がそれをしてくれたわけやから。

（2） 佐久間ダム¹⁶の建設現場で

— とこで、その弁天浜争議の後、職安の人の勧めもあって、佐久間ダム¹⁶の建設現場に行くことになったんですよね。今日聞きたい話題は、その佐久間ダムの建設現場で働いていた時の話を、もうちよつと詳しく聞きたいというのがあります。覚えてる範囲で聞きたいんですけど、行った現場でヤスさんがやった作業というか労働って、どんなことをやったんですか。いろいろやったとは思ってますけど。やらされた作業の中で一番印象に残っているものはどんなんですか。

ヤス やっぱり石やな。石担ぎ。こんなごつつい石を、こう担ぐわけや。せやから、相棒がしつかりしとったら、ぎゅつとな、石を上げてくれたら、前の人間が上げやすいわけや。それを、経験ない人やったら、何もせんから、前へ行くのがいややから、楽な方へ、後ろへ後ろへ回りよるわけや。

— えっと、どういうことですか。また、イメージわかへ

んねんけど。

ヤス 重たいからな、後ろおつたらな、担ぐときにわからんやん。せやから、前へやりよるわけや。重たいから、上がらんわけ。人間の知恵や。楽しようと思つたらな、前へつとつとやったら、重心が前へ行つたら重たい。上がらんやん。

— どれぐらいの石を担ぐんですか。

ヤス いや、結果、川に出来ている石やから、いろいろあるやん。軽いやつもあれば、重たいやつもある。また、川に流れている石いうたら、平均重いやん。普通の石とちやうから。まあ、数はないけどな。丸いしな。

— それを一人じゃなくて、二人で、複数で運ぶんですか。

ヤス うん、そうそう。下から上へ。山へ上げて行くわけ。今思えば、仏さんが祀る石を、「ああ、この石を積んどつたんやなあ」と思つて。工事出来るまでは。堰堤が出来るまでは。

— ああ、川底で堰堤作つて掘るから、石がいっぱい出て

来るから、それを取り出さないとあかんのですね。で、その石を担いで。なんか、バケツリレーみたいにして。

ヤス いや、藁で担いであげるわけや。天秤で。二人で。山道を担いで上げるわけや。山のてっぺんに石ないもん。石あつても、岩石なんか、あんな石、積まれへん。なんせ、

ダムいうたら、六〇〇〇人から七〇〇〇人の人が働いとるから、何やつとるかわからん。そら、大きい現場やから。せやから、同じ飯場でも、朝飯食べて別れたら、晩まで何しとるかわからん。

— じゃあ、石担ぎというのは、二人でコンビになって、えっほ、えっほと、担いで上がっていくんですね。山道。を。川底から。てっぺんまで。

ヤス あれがえらいねん。腰をいわしてしまふ。

— その現場では、朝から夕方までずっと、それをやるんでしょ。

ヤス そうや。そのような仕事をせんなんわけや。で、堰堤を打つときは、コンクリがな、機械が打つときは、今いうた、あないして打ちよるから。このような時分は、まだコンクリを打つ機械がなかったわ。今というたら、こんなんいつ出来たんかと思つた。コンクリを打つのに、あんなんはみんな鉄工の人がしよる。溶接してな。こう、鳶職みたいなもんや。われわれは土方やから、土方しか出来ひんから。で、コンクリ打つときは、土方もコンクリを打ちにいくけど、そんなところは回してくれへん。えらい、人のいやがる仕事ばかりでな。

— 必要やけど、しんどいから、みんないやがるという、そういう仕事を専門で引き受けるというのが、ヤスさん

たちの仕事やったんですね。石担ぎ以外で思い出せる作業といえば、どんなんがありますか。

ヤス あとは、コンクリを練らんなんからな、コンクリを練らんなんときは、セメを担ぎ上げんなんから。

— セメントを担ぎ上げる。ああ。袋に入ったセメントですか。

ヤス 昔は五〇キロやってん。今は四〇キロやからな。セメも砂もみんな、山のてっぺんまで担ぎ上げ、人力や。

— ダンプか何かでセメント袋が運び込まれるんでしょ、現場に。

ヤス そうそう。

— で、それを、そのセメント袋を担いで…

ヤス 現場まで持って行くわけ。石、砕石、コンクリを打つね、こまい、クラッシュヤーで割った、そんなんをコンクリに練らな、あんな石段出来ひん。で、コンクリを打ちもって、その石を順番に積んでいって、ほんでまた打つわけ。

(3) 「僕の身体は四回死んでいる」

— それで、前に、一番最初にインタビュウさせてもらったときかな、飯場の話を聞かせて下さいということ、トンネルで生き埋めになった話も聞かせてもらったんで

すよね。そのときにヤスさんが言った言葉ですごく印象に残っているのが、「僕のこの身体は四回死んでいる」と。

ヤス そうよ。

— その一回目というのは、トンネルの生き埋め事故ですよ。後残り三回はどんなことがあったんですか。

ヤス それは大阪に来てから、ビルの工事のときに五階から落ちて助かってん。足場から落ちて。その足場の下がちようど、暖房の黄色いガラス繊維を積んでいる上に落ちたわけや。ほんで助かってん。クッション代わり。暖房にする、黄色いね、素材があるわけ。それが、業者が持つて行って積んでるわけ。現場がこまいから。で、その上に落ちたわけ。

— それ、何歳ぐらいのときですか。

ヤス 三〇歳前後か。一番働き(盛り)の、体格のあるときやからな。そんな大きい現場とちゃうからな。こまい現場で足場して、一個のものを建てるだけやから。そういうところは何もあれへん。

— どの建設現場ですか。

ヤス ここからいったら、朝、雇いに来る人に連れられて行くだけやから。なんせ、この、あれはずさんな仕事や。

— ビルの建設現場。たぶん大阪市内。

ヤス そうそう。そうよ。大阪市内。

— 後の残り二つは何があるんですか。

ヤス 三回目は交通事故に遭うて、助かった。車で跳ね飛ばされて、飛んだわけや。ダンプがバックするときにな。

— バックしてくるダンプに跳ねられた。よう助かりましたね。いくつぐらいのときですか。三〇歳前後のときですか。

ヤス せやな。そんなもんや。で、後は水道工事しよって、土砂が崩れて、はさまれて、生き埋めになつてみたいになつて、それで病院に運ばれたら、圧迫何やという、あれで。それはいまだに忘れへんわ。えっと、昭和町へ行く地下鉄の工事現場の跡やつた。工事現場をするときは、地下鉄はH鋼を打ちよるからね。鉄のH鋼¹⁸。それを五〇センチおきぐらいに打つとるわけ。それを抜くのに、抜けへんから、溶接でH鋼を切つて、やれやれと思つたときにドサツと来たわけや。圧迫骨折で。

— それは地下鉄を作るときの工事ですか。

ヤス そうそう。地下の工事。せやから、朝、職安に行くでしょ。ほな、どこへ行くやわからんわけ。あつち回れ、こつち回れつて。で、そのときに。行つたときに。

— それは水道工事なんですか。

ヤス 水道工事は一メートル二〇センチぐらい掘らんなん

からね。せやから、この地下の道路の下では、ガス、電気、水道管がみなぎつしり並んで入つてゐるわけや。それも間隔、間隔あいて、入つとるわけや。そこを見つけて、あの、水道局の職員が入つて、パイプに穴をあけるわけ。穴をあけて、真鍮のやつを入れて、ほんで、そこから、街の家までホースをつなぐ、パイプをつなぐわけや。せやから、それがだいたいな決まつてんねんな。ガスは何メートル、電柱から何メートルと、みんな決まつてゐるわけや。

— で、その水道工事のときに土砂崩れが起きて……

ヤス あれは、地下鉄の一番上がるところの、完成してゐる横に、抜くのに、機械が抜かれへんから、もう「中でガス(バーナー)で切つてくれ」言われて。

— H鋼をガスバーナーで切る作業をやつてはつたんですね。で、それが切れたんですね。それでホツと一息ついたら、ドサドサツと来たわけですか。その作業してゐた現場というのは、地上から深さどれぐらいやつたんですか。

ヤス 二メートルぐらい。土砂崩れいうたら怖いからな、そらH鋼も完全に出てくるから、H鋼を抜こうと思つても長いやろ、長いやつやつたら、一〇メートルあんねん。それを下まで打つとるから、ユンボでは抜けへん。抜くのは金がかかるから、大きい機械でもつてグーッとやらな抜け

へんから、もう、見えるところだけガスバーナーで切つて埋めてまうわけ。せやから、あつちこつち、よう埋まっとる。

— うーん。抜けきれないから、途中で切つて、ガスバーナーで切るんですね。それをやつて、切り終わつたときに、崩れて来て。それはおいしくつぐらいの時ですか。

ヤス 三五、六歳か。そんなもんやつたと思うわ。

— 下手をすれば死んでしまうような事故にあつて、トラウマになつたりしないですか。こんな仕事こりこりやとか、高いところ上るのはいややとか、地下工事で働くのいややとか。

ヤス 飯食うていかんなんやから、何でもせなあかんやん。その執念や。これやらな、今日は日当くれへんわと思うたら、あきらめてやらなしようないやん。

— 仕事選んでられへん、みたいな。

ヤス ずっと勤められるところやつたらええけど、朝それに雇われて、その日で生活していかんなんから、そんなあれやあれへん。

— 生きていくためには、みたいな、割り切りがある。

ヤス そう、ある。

— 労災（保険）はないのですか。

ヤス ないない。こまいとこやつたら、労災なんかかけとらへん。労災なんか全然かけへん。名目では労災かけとる

とか、何やかんや言うけど、実際は、大きいところでも、下請、孫請いうてあるわけや。せやから、労災なんかかけとらへん。名目上、かけとるでと看板に書いてるとこもあるけれど、どうかなと思うわ。

— 前も同じこと訊いたかもしれませんけど、それだけ、安全管理などすぐくすさんで、働いている人の命なんて、何も気にしてないんですよね。そのことに対して怒りとか感じることはないんですか。

ヤス 何も感じひん。もう、そのように納得して行つてんねんから。本人がな。

— そういう現場だということを覚悟の上で、承知の上で行つてるといふことですか。

ヤス そうそう。

— 自分たちでもうちよつと集まつて、仲間同士集まつて、運動とか起こそうとか、組合作ろうとか、思わないんですか。

ヤス ないない。あの時分は、そんなん、あれへん。釜いうたら、そんなとこや。まあ、あれからだいぶきつなつてきて、変わつてきたけどな。あの時分はな、ありやあ、あれへんもん。飯場でもなあ、とんずらしたら、捕まつて、殴られて、袋だたきにあつて、そんなんもあるしな。まあ、それに引つかかつた奴が運が悪いわけ。そう、割り切らな

しようない。

(4) 飯場での人間関係をめぐって

— 飯場の話に戻りますけど、ヤスさんの話を聞いていると、例えば佐久間ダムのような、ダム建設の現場で働いたことへの思いが強いということが、強く伝わってくるんですよ。もう、何度も聞いて言葉だけど、「ダム自体が自分の子どもや」とか、それから、ダムの近くに慰霊碑があつて、「仲間に出たい」とおっしゃってましたよね。それで、訊きたいんですけど、その慰霊碑で眠っている仲間というのは、ヤスさんにとっては、土工として一緒に働いた仲間ということですか。

ヤス そんな仲間意識はあらへん。下請でみんな飯場に放り込まれて、共同作業しているだけや。そんな仲間意識なんかしよつたら、(飯場の)親父が怒りよる。「お前、仕事しに来たんか、組合作りに来たんか」って。捕まっ袋だたきや。

— せやけど、慰霊碑とか、眠る仲間のところに行きたいとか、会いたいとかいうのは、どういふことなんですかね。

ヤス もう、今はそんなあれ、僕は、はっきり言うたら、青春をね、そこまで捧げたということ。それで、子どもみ

たいになつたというわけ。青春を一つのものに捧げたから、子どもに会いたいという意味を言うてるわけ。

— じゃあ、飯場の中で、一緒に寝泊まりしている者とか、同じ現場で石担ぎとかしている者の間に、仲間意識ができたとか、友情が芽生えたとか、絆ができたとか、そういうものではないんですか。

ヤス ないない。もう、そんな、仕事を、みな共同作業やから、そんな人間性の意識ない。仲間意識やなんやしよつたら、組の親父が若いもん二、三人買うとるからな、こう行つて、いためつけたりするわけや。それはないわ。

— 別に友だちが出来たというわけでもない。一緒に寝泊まりしても。

ヤス ないない。ただ、寝泊まりして、そんな意識はないな。

— じゃあ、飯場の日常生活に関する質問になりますけど、朝起きてご飯食べますよね、親父の指示にしたがつて、いろんな現場へ行かされて、いろんな仕事をさせられますよね、それできついですよ、それで、帰って来ますよね、で、ちよつと一杯飲んだりするんですか。

ヤス 組が置いているところもあるし、酒を置いてないところもあるし、組の方針があるからな。せやから、仕事が終つて、余計に飲んだら、組織(6)いうて、給料から引かれる

わけ。その酒が二〇〇円やったら、飯場で飲んだら三倍ぐらい上がるわ。せやから、高いからみんな飲まんわけや。飲んだら明くる日、仕事えらいから。せやから、飯食うたら、コテンと寝るだけ。その繰り返しや。

— 自分のペースで、今日すこい働いたから、自分のペースで、そこそこ収入あるから、明日休もうとか、そんなもんじゃないんですね。

ヤス もう休もうと思ったら、親父怒りよる。「お前、何しに來たんや。働きに來たんやろ」って。「休みに來たんか」と怒られる。

— 連日働かなしやあないですね。

ヤス そうや。いややったら、黙って給料もらったらとんずらするかや。とんずらしたらな、見つかったら、自転車で追っかけてきよる。ほんで、駅で見張っとるわけや。せやから、それを見つからんようにして逃げる奴が、頭働かす。せやから、現場の近くの駅には行かんこと。わざと遠回りしてな、次の駅ぐらいに待って乗るわけや。

— ダム建設工事の飯場なんかでいうたら、そこまで酷使されるし、監視されるし、せやから、そこで働いている者同士、仲間ができるとか、友だちができるとか、そんな雰囲気やないということですね。そんなゆとりというか、そんな気にもならない。

ヤス ないない、ないよ。ゆとりなんかあらへん。また、飯場も目を光つとるから、そんなことでけへん。きついとこやったらね、丸太の上で寝かしとるわけや。で、丸太を叩いたら、響くから、ほんでみんな起きよるわけや。飯場いうたら、そんなとこや。半タコ、半分タコ部屋や。ほんで、飯食うたら、とんずらせんように、自動車ピシッとつけて、逃げんようにしとるわけや。

— 殆ど囚人労働ですね。

ヤス そうそう。はつきり言うたら、そうや。そんなあまいことあらへん。せやけど、西成に來たら、飯場入らんと自由ができるから、全国からみな寄って來るわけや。

— 自分のペースで働ける。

ヤス そうそう。いややったらな、仕事に行かへんかったらええねん。寝とつたらええわけや。で、金なくなったら、働いたらええんや。そんなんが、なんせ、仕事せん奴もおんねん。

— 寝起きしてた飯場って、どんなとこですか。住まいとしては。

ヤス 飯場いうたら、昔の仮枠、六尺の二尺やからな。その枠を囲んで屋根あるだけや。何もあれへん。冬は寒いし。仮枠、仮枠の釘を打って、六段ぐらい積んで、鉄板で屋根を作つとるから、雨露をしのげるいうだけや。

— 屋根は鉄板ですか。

ヤス ブリキ。雨が入らんかったらええようにしてるねん。軽うてな。せやから、山奥の飯場はみんなそう。雨露をしのげるいうだけ。

— 壁はどないなってるんですか。

ヤス 寒うてもう、(すき間風が) シュウシュウ、シュウシュウ、入りよる。あんまり風がきつところは、冬、仕事出来ひんから、せやからいったん何ヶ月か帰らんなん。

— 飯場の寝泊まりするところの壁というのは。

ヤス 何も塗ってへん。シュウシュウ、シュウシュウ、風が吹きっぱなしや。薄いベニヤを張っとるだけや。雨露しのげるだけやから。

— 寝るところって、何か敷いてるんですか。

ヤス 畳あるだけや。布団は黒い布団で、重たい布団やねん。温いことも、あれもあれへん、布団は。

— 食べ物って、どんなんですか。

ヤス 食べ物いうたら、味噌汁や。おかずいうたら、サバの塩焼き。それがご馳走や。ほんで、残飯が余るからいうて、犬飼うとんねん。ほな、犬を連れてきて、川原でポコンといわして、さばいて、一斗缶で。「今日タローおらん」言うたら、みんな知つとるわけや。ほな、「今日は肉や」言うて、ハハハと笑てる。また、犬の肉はうまい。煮

たら泡出てくんねん。その泡取ったら、肉と一緒や。

— それ、飯場の親父が飼うてる犬じゃないんですか。

ヤス そうよ。それを殺すわけや。親父はその用(残飯を食べさせて、太らせてから食べる)に飼うてんねん。飯場は残飯余るやろ、それを食わせて(笑)。ほんでまた食うて、また。せやから、一匹減り、二匹減り。で、魚を食いたいなど思ったら、ダイナマイトをね、雷管と信管を盗んで来て、粘土でそれを固めて、川に放り込むわけ。ほんならイワナがおるわけ。ポンツというたら、腹、上向いて、浮いてくるわけや。その浮いたやつを採るわけ。イワナって、それがまあ、飯場の一番のご馳走や。犬の肉と。それから、塩サバナ。

— ダイナマイトを盗んで怒られませんか。

ヤス それは、(飯場の親方に)内緒で盗むわけ。ほんで、あれを破裂させて、(指を)とばしてしまった奴もおるしな。こう、放そう思つても、ギユツと握つてもうたら、離れへんから、ポンツと(笑)。で、深い山やつたら、イワナがようけおんねん。あの、川の、水がきれいやから。ほんで、やつぱり、あのイワナがうまいねん。「今晚うまいもん食いたいなあ」言うたら、「いっちょやるか」って。ほんなら、雷管盗んで、持って帰って。ほんで、ポンツってやりよるわけ。ほんで、親父、「またやつたんか」「へい」つ

て(笑)。それ(半殺しにされること)はない。やっぱり、向こうにはプラスになる。おかず買わんでええから(笑)。人間はみな計算高い。なんせおもしろい社会や。

— そうですか。だいぶ飯場のイメージが前よりは、具体的にになりましたけど。せやけど、ヤスさんからダムの話 を聞く度に「子どもに会いたい」と、その話をよく聞いていたし、そのときに、ダムの近くに慰霊碑があつて、死んだ仲間が眠っているから、「仲間にも会いに行きたい」と言つてはつたように覺えているんで、そこで働いていた仲間には、かなり思い入れがあるのかなつと思つていたんですけど。

ヤス ないけど、やつぱり、多少は、あそこで働いておるから、会いたくなつて思うやん。それは、何か、呼んどるわけ。自然とね。そんな人は、誰も、身寄りのない人がようけおるから。一匹狼や。せやから、無事で生きて帰られたら、ええとせんなんもんや。事故があつて、死んでも、誰も祀る者おれへんやん。良心的な会社は、こないして、慰霊碑も建ててくれるけど、こまいダムやつたら、あんなん何もせえへん。あつたんやろうけど、そこまでみる暇あれへん。

— まあ、具体的に友だちになつたとか、絆が出来たとか、結束したとかいうわけではないけど、やつぱり境遇を同

じくする者同士の、何か思いみたいなものがある。

ヤス それはない。飯食つて、仕事して、帰つて来て、その繰り返しやもん。せやから組織を引かれたら、給料ないときもある。それが親父のコウセン²⁰やから。

— 仲間になつたり、友だちになつたわけじゃないんだけども…。

ヤス 一緒に働いているというだけや。飯場に仲間意識は通用せん。通用したら親父が困るから。自分のお抱えの若い衆を置いとるから、この人間ちよつと出過ぎとるとなつたら、晩に引つ張り出して袋だたき。「仕事するかせんか、どつちや」つて。ほな、嘘でも「する」言わなしようない。そんなんが重なるから、何も言われへんわけ。もう、上には暗い影が目を光らせているということを、常に思つとかな。

— まあ、それでも、さつきも慰霊の話をしてはつたけど、仲間になつたわけじゃないけど、同じ境遇におつた者同士、何か通じあうというか…。

ヤス あんねやろな。

— だから、ダムに対する思い入れというのは、ダムさえ見たらいいのではなくて、横に慰霊碑があるはずやから見たい、と。

ヤス 何かが働くわけ。で、そこで子どもに会つて、青春

を投じたという、夢物語があるわけ。²¹ まあ、一つの自己満足。

— 何かあれですか、慰霊碑に対する思いというのは、それだけ使われて使われて、中には事故とかで死んだ人もいるでしょうね。そんな人に対しては、別に友だちというわけじゃないけど、同じ境遇にいた者として、何かちよつと、手を合わせたいというか、そんなんですかね。

ヤス それはあるやろな。そのために慰霊碑があるんやから。まあ、最後のしめ。最後の人間的なしめくりみたいなものや。その現場でも事故があるんやから、その事故を、まあ、慰霊碑の下に魂がみな固まって眠つとるわけや。

— ああ、そう言えば、僕も、この前（佐久間ダム）写真を撮りに行って、初めて知ったんですけど、ダムが出来てから、天皇と皇后が見に来ているんですね。それ、知ってはりましたか。

ヤス あのとときは、大きいダムにはみな来ている。こまいダムも来とったかもわからん。そこまでしたかどうかもわからん。まあ、日本では佐久間ダムと黒四が一番大きいのとちやうか。黒四もようけ死んどるからなあ。まあ、大きい工事には、だいぶ負傷者が出ているもんや。一つの戦争と一緒に（笑）。今思うたら戦争と一緒にや。一つの目的を合わせて、モノを作るいうな。一個の部隊を作るとい

うことやな。せやから、若いから、青春を、一つのものを作るという思いで、青春を捧げたんやから。ほんまの男社会や。おなごは一人もおれへん。それは一個の組織で、あんな巨大な一個のあれを作りよるわけや。せやから、出来た暁には会いたいと思うのはそこや。せやから、この、先生が持つて来てくれた（佐久間ダム）写真を見て、俺は涙こぼした。わあ思うて。そこまで見いひんから。完成した姿、見いひんから。ほんでまた、その時分は、完成するときやったら、労務者はおれへん。次の現場にせかされてるから。そら、上の人やったら、出て来とるやろうけど、われわれ一番下つ端なんかは、そんな、まわれへん。せやから、どんな社会でも、一番下つ端はな、つまらん。せやから、つまらんから、つまらんように生きていかな、しようがない。

おわりに—若干の解説として—

以上、本稿ではヤスさんのライフヒストリーに関するインタビューを紹介してきた。ただし、本稿で紹介したものは、合計八時間以上にわたる対談の一部を抽出して編集したものに過ぎない。本稿で紹介した証言の他にも、興味深い内容の証言を得ることができたし、戦時中の小学校教育の体験や、「むすび」への思いについても話を伺うことが

できたが、紙幅の関係上割愛した。それでは、本稿で紹介した聞き取り記録について、私たちはいかなる点に注目すべきなのか。ヤスさんのライフヒストリーを現代史に位置づけ、さらに現代史を捉え直すための検討課題についてもふれながら、展望を述べることにしよう。

本稿で紹介したものは、一九四五年三月一七日の神戸大空襲の下での凄惨な体験から始まって、自由労働組合を中心とするバラック集落立退反対運動、ダム建設の飯場での労働・生活の実態、釜ヶ崎で暮らす日雇労働者が働く現場の実態等々、従来の現代史研究では十分取り上げられることのないような問題領域に関する証言である。さらに、以上のような現場をかくぐつて生きてきたヤスさんの生き様を、当時の本人の思いをまじえながら紹介することもできた。そして、全体を通じて明らかなのは、ヤスさんは敗戦直後に浜仲仕の仕事に就いて以来、野宿生活をするに至るまで、一貫して「働人」「ニコヨン」としての自負を抱いて生きてきたということである。まさにヤスさんは、戦後六〇年近い歳月を日雇労働者として生きてきた人であった。その意味で、本稿では戦後の日雇労働者の生き様に関する一事例を紹介したのであり、歴史学における現代都市下層社会研究を開拓するための、基礎作業に着手することができたと筆者は考えている。

それでは、ヤスさんの日雇労働者としての生き様について、注目すべき論点を整理しておこう。全体を通して気づかされることは、「生きるのに必死だった」「とにかく働いた」という類の発言が多く見られ、そこからヤスさんは「働人」「ニコヨン」としての自負を抱きながら、日々のねぐらと飯代の確保という、最低限の生存を全うするため懸命に生きてきたことが窺える点である。ただし、「要するに、働人は仕事がありやあな、ええわけよ」（本稿（上）の一〇五頁）、「つまらんように生きていかな、しようがない」（本稿（下）の一七頁）という発言に典型的に見られるように、そこにはある種の割り切った思いが付随していることを見落としてはならない。さらに、ヤスさんは自由労働組合の運動から離れて以後、労働組合運動には背を向け、飯場での暴力や杜撰な安全管理に怒りを覚えることもなく、日々のねぐらと飯代を確保するために働き続ける生き方を、野宿生活をする頃まで貫いた。その生き様について、ここでは、自らの生存を権利として主張すること²²をしないままに生存を追求し続けたという意味で、仮に「権利の追求なき生存追求」と規定しておこう。

次に、ヤスさんの証言からは、「権利の追求なき生存追求」の姿勢が、歴史的にどのような過程を経て形成されてきたのが浮彫になっている点にも注目すべきであろう。

この点について、ヤスさん自身が特にどのような話題で多くを語り、全体として何に対する思いが強いかということ振り返ってみると、ヤスさんのライフヒストリーで大きな比重を占めるのは、神戸大空襲での体験、自由労働組合における運動の経験、ダム建設の飯場における労働・生活の体験であるように思われる。特に、弁天浜争議を経て「階級意識が変わってきた」（本稿（上）の一〇八頁）と述べている点や、それ以後労働組合運動には背を向けている点は重要である。当時の神戸における自由労働組合の運動や弁天浜争議について、その実態を明らかにしたうえで、ヤスさんの証言を再解釈することが必要となろう。

さらに重要なことは、ヤスさんは「権利の追求なき生存追求」の姿勢を貫いたが、何をされても怒らなかつたわけではない。第一次釜ヶ崎暴動の証言にみられるように、ヤスさんは手配師によるピンハネには不満と怒りを表明し、暴動の渦中に飛び込んだ。しかし、ヤスさんはそれでも労働組合運動には背を向け続け、それ以後命に関わる労災事故に何度も遭っているのに、それまでの生きる姿勢を変えようとはしなかつた。このことから、何を讀み取るべきであろうか。ヤスさんの働くことへの思いをどう解釈するべきであろうか。釜ヶ崎という地域社会における労働・生活のあり方を踏まえ、暴動が頻発したことの意味を考える

必要がある。そして、第一次暴動発生以後本格化する、労働組合運動の取り組みにも注目する必要がある。

以上のような論点に留意しながら、ヤスさんの証言を再解釈し、日雇労働者・野宿者を現代史の中に位置づけ、あわせてオーラルヒストリーの方法論について考えることが、今後の研究課題である。

(15) 本誌八号掲載の拙稿「聞き取り記録 ある日雇労働者の戦中・戦後（上）」の一〇九頁を参照。

(16) 静岡県浜松市天竜区と愛知県北設楽郡豊根村にまたがって立地し、天竜川の中流部に位置する、水力発電を主目的とするダム。一九五三年着工、一九五六年竣工。堤高一五五メートル。堤頂長二九三メートル。アメリカから導入されたダンプカー、パワーショベル、ケーブルクレーン、ジャンボ掘削機など、日本で未経験の土木機械が、このダムを建設するために導入された。当時は安全管理の意識が低かつたこともあり、洪水や落石・転落事故により九六人も死者を出した。

(17) 第一回の調査で得られた、以下の証言を念頭に置いた質問である。ちなみに、トンネル工事の最中に落盤事故に遭つたのは、久瀬ダム建設工事の現場で働いていたときのことであるという。

それで、トンネル工事でね、埋まったことがある。僕の身体もう四回死んでんねん。トンネルの工事で六〇〇メートル入ったところで入り口が埋まってもうた。電気消えておかしいなあ思ったら、入り口が落盤で。一週間か一〇日ぐらいトンネルの中で身動き出来へんだ。

(18) H形鋼のこと。H形鋼とは、断面がH型をした大型鋼。圧縮耐力と曲げ耐力にすぐれる。建物・橋梁・船舶などに使われる構造材用と、高速道路・建築物・岸壁などに使われる基礎杭用がある。

(19) ヤスさんの証言によれば、飯場で諸経費を差し引かれることを「ソシキ」と呼び、それは漢字では「組織」と書くという。本稿では、ヤスさんの証言にしたがって表記している。ただし、小柳伸顕「労働と生活」(前掲『釜ヶ崎 歴史と現在』所収)によれば、飯場で購入したものの計算書を「諸式」と呼ぶとされている。ヤスさんが「諸式」を「組織」と誤解している可能性がある。

(20) ヤスさんの証言によれば、飯場の親方の儲けのことを「コウセン」と呼ぶ。ただし、漢字でどう表記するのかわからない。不明であるという。

(21) この点に関して、第一回調査では、ダム建設現場での体験談として、次のような証言も得ている。ただし、どの建

設現場での体験なのかは不明である。

関西電力の偉いさんが来たもんな、「あんたの若い血潮が、日本の経営が発達する電力が必要やから、若い命を私に預けて下さい」って。安原会長です。あれも僕ら仕事しとって、マイクで聞いた。あれマイクで聞いたんか、録音か知らんけどな。なんせ山奥ですわ。

(22) ここで整理したヤスさんの日雇労働者としての生き様は、牧原憲夫が近代民衆の政治意識のあり方として提示した、客分意識と重なるところがある。牧原によると、客分意識とは、生活が脅かされれば実力行使も辞さないが、自らは権力を担おうとせずに安穏な生活が送られることを望む被治者意識で、さらに、それは制度的変容を伴いながら歴史貫通的に存在するという。筆者は、近現代の民衆意識にそのような側面があることを否定しないが、日雇労働者や野宿者のような疎外された人びとの生き様を説明する際に、客分概念を用いることが妥当であるとは考えない。確かに、「仕事さえあればいい」などの発言と、ピンハネに怒りを覚えて暴動の渦中に飛び込んだ点は、客分意識の範疇に入る行動かもしれない。しかし、ヤスさんが確保しようとしたのは日々のねぐらと飯代という最低限の生存条件であって、「豊かさ」の追求と言えないのではない。また、最低限の生存追求は「豊かさ」を追求することへの諦観と表裏一

体の関係にあるように思えてならない。こうした生き様は、客分概念で説明できるとは思えないのである。

さらに、今回の聞き取り記録から明らかになったことは、ヤスさんの生き様は、戦争、労働運動、飯場生活での経験を経て形作られてきたものであり、そこに、戦争による生活破壊、住民運動における日雇労働者の置き去り、飯場における暴力というネガティブな経験の重さと、最底辺から社会を支える人間を使い捨てにしてあきらめの境地に迫りやる経済成長のあり方が見出されなければ、ヤスさんの生き様を現代史に位置づけることはできないということである。客分意識は歴史貫通的に存在するという、牧原の見解には人びとの経験の重さと経済成長のメカニズムを問う視点が欠けている。

筆者が、ヤスさんの生き様について、客分概念を用いずに「権利の追求なき生存追求」と暫定的に規定したのは、以上のような理由による。なお、牧原の客分概念については、同上『客分と国民のあいだ』（吉川弘文館、一九九八年）及び同上『覚書『客分』再考』（『九州史学』一二九号、二〇〇一年）を参照。

〔付記〕長時間にわたるインタビューに快く応じて下さったヤスさんと、ヤスさんとの連絡を仲介して下さった「むすび」

マネージャーの石橋友美さんに、末尾ながら心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

（金沢大学准教授）